

北京語文白異読の形成過程について

中村雅之

1. はじめに

これまでに『KOTONOHA』誌上で何度か北京語の文白異読の問題を扱ってきた¹。ここではその総まとめとして、文白異読の形成過程について記してみたい。要点は次の三点である。

- (1) 宕江撮および曾梗攝入声字の白話音は10世紀以来の伝統的な北方音である。
- (2) 宕江撮および曾梗攝入声字の文言音は15世紀に南京官話音の模倣として北京語に導入されたものである。
- (3) 通攝入声字については、文言音が伝統的な北方音であり、白話音は明代後期以降(おそらく清代)に生まれた音形である。

以上の根拠とした所は、契丹小字・パスパ文字・ハングルなどによる対音資料であり、韻書や韻図には重点を置いていない。その理由は、韻書や韻図には理論的な体系を求めるための必要以上の虚構(伝統的なカテゴリーや複数地域の音の集積など)が含まれること、そして何より、北京語という言葉が北方諸民族との接触によって発達したものと見なした場合、それらの民族の文字による資料こそが北京語の歴史的研究にとって最も拠るべきものだからである。

2. 文白異読とは

北京語には「剥(bo, bao)」「角(jue, jiao)」「得(de, dei)」「熟(shu, shou)」など、二音を持つ字が多数ある²。これらの多くは「-o/-ao」「-ue/-iao」「-e/-ei」「-u/-ou」のように一定の型を持っており、前者を文言音(または文語音・読書音)と称し、後者を白話音(または口語音)と称する。このような文白異読は旧入声字のうち中古音で/-k/韻尾を持っていた宕攝・江撮・曾撮・梗撮・通撮にほぼ集中している。また、現在一音のみを伝えている場合でも、その型によって文言音か白話音かは明白である。例えば、「黒(hei)」はその音形から白話音と認定される(文言音「he」は現在伝わっていない)。

北京語の文白異読に関して注意しておくべきことは、その名称と内容とが必ずしも合致していないことである。文言音あるいは文語音や読書音という名称は本来、経書

1 中村(2006b)、中村(2011a)、中村(2011b)を参照。

2 現代北京音にはピンインの綴りを用いる。ただし声調記号は省略する。

や史書を読み上げる際の発音を意味しており、白話音・口語音は日常の会話における発音を意味している。実際、南方における文言音と白話音は旧来そのような性格のものであったと思われる。しかし、北京語においては日常の会話に文言音と白話音とが混在しており、とりわけ白話音が淘汰されて文言音のみが残った「学(xue)」や「約(yue)」などは当然会話においてもそれが用いられることになる(「学(xiao)」「約(yao)」は現在では用いられない)。逆に文言音が淘汰されて白話音のみが残った「百(bai)」「菓(yao)」は書物を読み上げる際にも用いられている(「百(bo)」「菓(yue)」は用いられない)。つまり、北京語における文白異読とは、読書音と口語音という本来の意味から離れて、単にその音形の区別に対して与えられた名称であると認識すべきである。

3. 形成過程についてのこれまでの研究

北京語の文白異読の問題を初めて体系的に扱ったのは長田夏樹(1953)である。『中原音韻』(1324)および『老乞大諺解』(1670)の右側音と北京語音を比較検討した結論として、「北京語は入声脱落に際し glottal stop を持たなかったA方言と、glottal stop を持ったB方言とが接触して出来たA-B方言に、更にB方言と同系の言語が、読書音として入って来たもの」とし、「B系読書音としては南京方言が考へられる」とした。このような結論に至った根拠を長田氏は詳しく述べないが、おそらく次のようなことであろう。

『中原音韻』は長田氏が「白話音が体系的」と述べたように、全体的には北京語の白話音に相当する音形が支配的であるが、その中で宕江通撰入声字には「薄[pau]～[po]」「略[liəu]～[lio]」「宿[siəu]～[siu]」のように白話音のみならず文言音に相当する音形も見える³。ところが、曾梗撰入声字においては白話音に相当する音形(「得[tei]」「白[pai]」など)のみで、文言音に相当する音形は見えない。一方、『老乞大諺解』(1670)の右側音では、宕江撰と曾梗撰の入声字全般にわたって文言音と白話音の音形が確認できる(通撰は文言音のみ)。このことから、北京語の文言音は一度に形成されたのではなく、最初に宕江通撰において、その後しばらくして曾梗撰において形成されたものと長田氏は考えたのであろう。そして曾梗撰入声字の文言音(「得de」「白bo」など)は南京方言の流入によって生まれた可能性を示唆したのである。

その後、日本では平山久雄氏や佐藤昭氏などが北京語の文白異読の問題を扱ったが、長田氏が目指したような歴史的な文白異読の形成過程についてはあまり触れていない。中国では1980年代以降、いくつかの論が出ており、張世方(2010:124-125)

3 『中原音韻』の再構音は楊耐思(1981)による。

に各説の要点がまとめられている。その中でごく最近の研究である高曉虹(2009)の説には長田(1953)と共通する部分があり注目される。

高氏はまず、他の研究者と同様に、白話音が北京語古来の層であることを認めた上で、文言音に三つの層を想定する。

①遼金時代に北部官話(北京周辺)の読書音の影響により通撰入声字の文言音が形成された。

②元代に中原官話(汴洛地方)の影響により宕江撰入声字の文言音が形成された。

③明代官話(南京)の影響により曾梗撰入声字の文言音が形成された。

このうち、②③が長田説に似ているのは、ともに『中原音韻』の状況(曾梗撰に文言音なし)を解釈しようとしたからである。長田氏は②を汴洛方言の影響とは断言しなかったが、高氏に限らず中国の研究者の多くは汴洛方言との関連を想定しているようである。①は『蒙古字韻』の音系を北部官話における「読書音」と規定した上での論であるが、その読書音は一体何に由来するのかという疑問が残る。

4. 対音資料による解釈

1節にも述べたように、韻書をあまりにも重要視することには問題がある。その意味で、長田氏や高氏が『中原音韻』を最重要資料としていることは方法論上の危険を伴うと言うべきである。とりわけ文白異読に関しては、『中原音韻』は各種の対音資料と明瞭な相違を示しており、どちらを用いるかで解釈も大きく異なってくる。

対音資料において最も重要な点は、契丹小字(10世紀創製、現存資料は11-12世紀のもの)、パспа文字(1269年公布)、そして15世紀半ばのハングル⁴による漢字音表記には、宕江曾梗撰入声字において、白話音の音形のみが記され、文言音が一切記されないことである(通撰については後述)。つまり、これらの資料に拠る限り、10世紀以来の北京語には、少なくとも15世紀前半までは、白話音のみがあり、文言音はほぼ存在しなかったと考えざるを得ない。このような状況を見無視して、『中原音韻』によって北京語文言音の形成過程を論じるのは、適切な方法と言えるであろうか。

概略的に見れば、『中原音韻』が北京語の体系に非常に近いものであることは認められるし、近世音という大枠の中でこれを北京語の資料に準ずるものとして捉えること

4 具体的には『洪武正韻訳訓』に「俗音」として見える音形、および『四声通考』の「俗音」を引用した「翻訳老乞大・朴通事」の左側音を指す。なお、これらのハングル表記では、濁音声母や入声韻尾らしきものが記されるが、伝統的なカテゴリーを踏襲した形式上のもので、音声的な実態を伴ったものではない。このことについては、中村(2006a)を参照。

はそれほど間違っているとは言えない。しかし、文白異読の問題に関して言えば、『中原音韻』を北京語の資料とすることには問題がある。『中原音韻』に見られる宕江撰入声字の文言音はおそらく北京以外の(例えば汴洛地方の)音を取り込んだものであり、北京語そのものではない。各種対音資料がそのことを如実に物語っている。

さらに16世紀初頭のハングル資料(崔世珍による「翻訳老乞大・朴通事」の右側音)は極めて重要な示唆を与えてくれる。そこには、伝統的な白話音の他に文言音も大量に記録されているのである。15世紀半ばの段階で見られなかった宕江曾梗撰入声字の文言音が16世紀初頭に記されるということは、それらの文言音が15世紀後半にほぼ同時に北京語に取り込まれたことを意味する。つまり、長田氏や高氏が想定したように宕江撰と曾梗撰の文言音が二段階で形成されたのではなく、どちらも15世紀に同時に北京語として形成されたということである。なぜ15世紀に文言音が形成されたかと言えば、南京音に基づく官話がこの時期に急速に広まったからと考えるのが合理的である。すなわち、北京語の文言音は南京官話音の模倣として15世紀に生まれたと考えられる。このことは明清代の南京官話の音形と北京語文言音の音形に著しい類似があることから確認できる。

通撰については事情が全く異なる。『中原音韻』には、「宿[siau]～[siu]」のように白話音と文言音が見られるが、契丹小字・パスパ文字・ハングルの各資料には文言音に相当する音形のみが記され、白話音は見えない。すなわち、『中原音韻』を北京語の資料と見た場合には、元代にすでに通撰の文白異読が存在したことになるが、対音資料によるならば、遼代から明代中期までの北京語には一貫して文言音に相当する音形しかなく、白話音はさらに後の時代の産物であると考えざるを得ない。

以上のように、文白異読を論じるにあたっては、資料として『中原音韻』を用いるか、あるいは対音資料を用いるかによって、導き出される結論が異なる。北京語の歴史的研究は対音資料に拠るべきであるというのが本稿の立場である。

5. まとめ

上に述べた所をもう一度まとめると以下の通りである。

- (1) 「落(lau)」「角(jiao)」「得(dei)」「白(bai)」などの白話音は10世紀以来の伝統的な北方音を受け継ぐ音形である。
- (2) 「落(luo)」「角(jue)」「得(de)」「白(bo)」などの文言音は15世紀に南京官話音の模倣として北京語に取り込まれたものである。
- (3) 「宿」「熟」は文言音「su」「shu」が伝統的な音であり、白話音「xiu」「shou」は北京

語においては明代後期以降(おそらく清代)に生まれた音形である。

以上は各種対音資料の検討から自然に導き出される結論である。それらの対音資料が本当に北京語の資料であり得るのかという点は問題になるが、少なくとも北京語かそれに近い地域のものであることはできるであろう。契丹小字・パспа文字・ハングルによって記された音形が非常によく似ているという事実⁵は、それらが北京語(もしくは近隣の方言)を写したものと考えて矛盾がない。逆に、それらと異なる状況を示す『中原音韻』は、少なくとも文白異読に関しては、北京語の資料とは言えないことになる。

参考文献:

- 長田夏樹(1953)「北京文語音の起源に就いて」『中国語学研究会会報』11. のち『長田夏樹先生追悼集』pp.45-49所収、好文出版、2011.
- 楊耐思(1981)『中原音韻音系』, 中国社会科学出版社.
- 中村雅之(2006a)「翻訳老乞大朴通事の左側音の入声表記について」『KOTONOHA』41.
- 中村雅之(2006b)「翻訳老乞大朴通事の右側音」『KOTONOHA』42.
- 高曉虹(2009)『北京話入声字的歴史層次』, 北京語言大学出版社.
- 張世方(2010)『北京官話語音研究』, 北京語言大学出版社.
- 中村雅之(2011a)「北京語文語音の起源」『KOTONOHA』98.
- 中村雅之(2011b)「六・宿・熟などにおける文白異読の問題」『KOTONOHA』99.

5 もちろん個別に見れば、全てが一致する訳ではない。例えば、「客」は契丹小字「k'ai」、パспа文字「k'iai」、老朴の左側音「k'yi」、老朴の右側音「k'ie」である。このうち、老朴左側音以外は、/k'ai/ > /k'iai/ > /k'ie/ という変化の過程を写したもので、今ではほとんど聞かれなくなった北京語の白話音「qie」(/tɕ'ie/) に連なるものである。老朴の左側音「k'yi」(/k'ei/) はそれらとは合わないが、このような例は多くはなく、ハングル資料を北京語の研究に利用することを妨げるものではない。